

# 見立て発想法序説

村上直之

## 1.

「カストロフィと正義」という言葉を聞いて、私がすぐに思い浮かべるのは、わが国の原発訴訟の問題です。これまで、原発は危険だと訴える地域住民による訴訟は50件以上も提訴されてきました。住民側が勝訴した判決は下級審でたった2件、しかしそれも最高裁までいって、すべて敗訴しています。

静岡県の浜岡原発をめぐる訴訟は、2007年、地裁で敗訴しました。その判決に対して、地震学者の石橋克彦さんはその年10月26日の毎日新聞で、「この判決が間違っていることは自然が証明するだろうが、その時私たちは大変な目に遭っている恐れが強い」とコメントしています。ちなみに、石橋さんは1977年、「原発震災—破滅を避けるために」を発表し、地震災害と放射能汚染が複合的に起こる災害に警鐘を鳴らしています。

また、今回の福島第一原発事故の報道を受けて、浜岡原発をはじめ、数多くの原発訴訟を闘ってきた海渡雄一弁護士は、「地震の時に非常用ディーゼル発電機が使えなくなるということは、浜岡原発訴訟の中で主張していた主要な点です。また、地震によって交通渋滞を来たし、電源車が間に合わず、その夜の段階で炉心が空焚きになって核燃料がメルトダウンすることは確実だと思っていました」と語っています。

あの3月11日の時点で、わが国のマスメディアはどここの社も、海渡雄一弁護士の話に耳を傾けてはいません。私たちこの国の人間は、政治家・官僚・財界そしてマスメディアによって強固に構築された「原発安全神話」に閉じ込められて生きてきました。だが、そればかりでなく、本来は法と正義の番人であるべき司法によってさえ、私たちはみな目を覆われてきたのです。

今や、あの忌わしい福島原発事故というカストロフィによって、原発安全神話は崩壊し、それを支持してきた司法もその責任が問われつつあります。東日本大震災を「第二の敗戦」と呼ぶ者は、敗戦からの復興の願いを込めてそう名づけたのですが、当時「戦争責任」が厳しく問われたように、その責任の追及がなされてこそ、この未曾有のカストロフィに対する正義が実現されることでしょう。

以上のように思う私にとって、この国際カンファレンスはそのスタート、いわば序曲として位置づけられるべき集いと考えます。私たちはこれから重々しい課題にたちむかわなければならないわけですが、カストロフィーという概念がけっしてネガティブなだけの内包をもつものでないことは忘れてはならないでしょう。

## 2.

さて、今日の私は、The Mitate Method as Japanese Creative Device というテーマでお話ししようと思っているのですが、先ほど触れた原発訴訟や原発安全神話とは直接の関係はありません。

じつは、カタストロフィという言葉自体に触発されて決めたテーマなのです。

先ほどの原発事故や東日本大震災をカタストロフィと呼ぶ時、それは自然災害であれ人災であれ、非常に壊滅的な厄災つまり Calamity の意味です。

ところが、カタストロフィという言葉は、もう一つまったく別の意味があります。私が学生だった当時、「カタストロフィ理論」というのが評判を呼びました。これはフランスの数学者ルネ・トムという人が唱えたものです。若い頃の刷り込みとは恐ろしいもので、私にとって、カタストロフィという言葉は、「通常では一定で安定しているが、わずかな点でもある限界をこえると、急激に特性が変化する。トポロジーつまり位相幾何学という特異点を境界として不連続的な変化が生じること」です。例えば、水は0度を超えて冷やすと氷という固体になり、100度を超えて熱すると水蒸気という気体になります。それに、今回の原発事故で核燃料のメルトダウンが起きた臨界点も、カタストロフィ理論のいう特異点のひとつにほかなりません。

カタストロフィ理論のもつ魅力は、カタストロフィをトポロジカルな形態の変化パターンとしてタイプ分けしたことです。ここではいちいち説明を省きますが、私の友人の数学者によると、この理論の論証プロセスは相当複雑なようですが、結果は実に美しいほどシンプルで、私のように人文社会系の人間にも理解できるものでした。

## 3.

さて、人文社会系の私としては、このルネ・トムのカタストロフィ理論に触発されて、文化が大きく変容する際の「特異点」singularity は何だろうか、と考えるのです。

たとえば、古代中国の秦で行われた焚書坑儒や1960年代の文化大革命など、既存の文化の徹底的な破壊は一見、そうした特異点のように見えます。けれど、歴史的にみて、文化は政治経済のような革命的变化を好まないようです。儒教は今も深く中国民衆の間に根づいています。

最近、創造的破壊という言葉が産業界におけるイノベーションの重要なキーワードとなっています。けれど、芸術文化のジャンルを見ると、20世紀の芸術はすべてこの創造的破壊によってなされたといってよいでしょう。ダダイズムからシュルレアリズムそしてそれ以降の美術史はその延長線上にあります。しかし、西洋美術の変容の最初の契機となったのは、19世紀後半の西欧文化へのアジアやアフリカという異文化の影響、とりわけジャポニズムの影響であると私は考えています。

さて、私がここで考えてみたいのは、①自国内で新たな文化芸術が開花する時、そして②異文化との接触によって新しい文化芸術が生起する時、その特異点となるのは何かということです。

### 3-1

さて、①のテーマについては、日本文化について考えてみましょう。

日本文化の歴史を大きく二つに裁断するとすれば、江戸時代それも元禄から明和（17世紀終わりから18世紀半ば）ということになります。それ以前の文化は、僧侶と公家と武士を中心とする「聖」と「雅」の文化で、それ以降は職工と商人つまり町人によって担われた「俗」の文化です。

元禄の文化を代表しながら、21世紀の今日の私たち日本人どころか、世界中で親しまれているものといえば、松尾芭蕉を頂点とする「俳諧」です。俳諧、つまり今日の「俳句」は、平安公家たちの雅な和歌や連歌の世界を、江戸庶民の日常語つまり俗語を取り入れることによって生み出されました。

また、明和年間に、現在でいう多彩色の浮世絵、当時、東錦絵と呼ばれた版画が生まれました。この浮世絵も、19世紀になって西欧美術にジャポニスムという大きな影響を与えます。その創始者は鈴木春信という神田白壁町に住む絵師ですが、面白いことに同じ町内にあの平賀源内という発明家が住んでいました。一説では、春信に多色刷り技法、つまり版木の角に見当をつけることを教えたのは、この源内先生だったと言われています。平賀源内は植物学者でもあって、いち早く多色刷りの植物図譜を出しているからです。さらに興味深いのは、彼こそ、江戸文学を代表する戯作、今日の大衆小説の創始者でもあったことです。

さて、芭蕉の俳諧、春信の多色刷りの浮世絵、源内の戯作には共通する特徴がみられます。それが、「見立て」です。

つまり、これらの江戸文化を生みだした発想として共通するのが見立てなのです。もっと大胆に、江戸人の発想そのものが「見立て」であると喝破したのが、石川淳という作家です。この作家は戦後日本で、太宰治や坂口安吾とともに戯作派とか無頼派とか称されました。

私はこの発想を「見立て発想法」と呼んでいます。今日はその技法の数々にまで立ち入っては説明しませんが、その最大の特徴について話します。

先ほど、芭蕉の俳諧は、それまで僧侶や公家や武士階級の特権的な「聖」と「雅」の文化を江戸町人の「俗」の文化に置き換えたと言いましたが、その方法が見立てであり、とりわけ「やつし」と呼ばれる方法なのです。「身をやつす」といえば、本来は高貴な身分の者が卑しい姿に変装する、あるいは神が老人の姿で人びとの前に現れることです。でも、いくら身をやつしてもどこかにその高貴な雰囲気は現れてしまいます。

じつは、見立ての手法の「やつし」とは、これを逆手に取るといいでしょうか、雅なものを俗に置き換えることで、逆に、俗そのものの価値を高めるのです。

芭蕉の句でいえば、有名な「古池や蛙飛び込む水の音」の中では「飛び込む」という言葉が俗です。それまでの和歌の雅な世界にはそのような卑俗な言葉は禁句で、和歌に歌われる蛙は泣くものであって、けっして飛び込んではいけなかったのです。

初期の若い芭蕉は、富士山を盆栽の杉の木に見立てた「雲を根に富士は杉なりの茂りかな」など、才気にみちた見立て句を数多く詠んでいましたが、中期になると「何事の見たてにも似ず三日の月」という句を詠んでいます。ここには、「見立て」から解放された自由闊達な心境が歌われているのです。逆にいえば、彼がそれまでいかに見立てにこだわり、雅な古典文芸の世界を江戸町人の俗なる世界に転換させることに必死だったかを端的にものごとがたっています。さらにいえば、既存の文化から新しい文化が生まれる跳躍のモメント、言いかえれば「特異点」

としての「見立て」は、その文化的革新の後には忘却されなければならないことを語っているのです。

ところで、芭蕉の辞世の句として、「旅に病んで夢は枯野を駆けめぐる」という物狂おしい句が知られていますが、この句の2日後、「清滝や波に散り込む青松葉」という句を残しています。先の「旅に」の句の方が芭蕉らしいということで、この句はまったく無視されてきたのですが、奇抜な人がいて、京都嵯峨野の清滝には句碑が建てられています。しかも離れた場所に二つも立っています。



それはともかく、この句はなんと清澄な躍動感にあふれていることでしょう。じつは、この句は、見立て句なのです。どこが見立てかという、まず青松葉は桃青とも称した松尾芭蕉その人です。そして、波とは生命の流れの波であり、芭蕉という一つの生がその大きな流れに合一するというダイナミズムが詠まれています。「旅に病んで」の句にくらべて、ここには悟りに似た境地がうかがえるではありませんか。

少し芭蕉に拘りすぎました。先を急ぎましょう。

さて、春信に代表される浮世絵ですが、「浮世絵はすべて見立て絵だ」とさえ言いきる研究者もいます。浮世絵コレクションで知られる東京「タバコと塩の美術館」の岩崎均史氏ですが、どのように聖なる世界あるいは雅な世界を、卑近な当代のものごとに見立てているかを画像で見してみましょう。

始めの一枚は、中国の故事にちなんだ浮世絵で、竹林の7賢人をすべて遊女に見立てています。

次の一枚は、これも中国の寒山拾得という二人の超俗のお坊さんを街娘に置き換えて描いています。



このような例は枚挙にいとまがありません。紫式部の源氏物語は江戸時代になってリバイバルして町人の間でよく読まれるようになりますが、そのひとコマひとコマがすべて遊女や街娘の情景に置き換えて描かれています。繰り返しになりますが、このように古典の世界を当代の事物や人物に見立てることによって、その俗の世界そのものの価値をいっきよに高める、その媒介となっているのが俳諧であり、見立て絵としての浮世絵だったのです。こう

して江戸の中期には、華やかな町人文化が一斉に風靡することになりました。見立てという方法が文化のカタストロフィを起こすまさに特異点となったことがわかると思います。

### 3-2

さて、最後に、②異文化との接触によって新しい文化芸術が生起する例を、19世紀西欧の美術に与えた浮世絵の影響つまりジャポニスムについて、話してみたいと思います。

まずは、もう15年以上も前に制作した『見立て発想法』のCDROMをお見せしましょう。



### 図柄借用



図柄をうつす  
図柄をアレンジして借用

- ・人物
- ・風景
- ・動物
- ・植物
- ・波
- ・幽霊
- ・格子

### 配合



俯瞰  
ロートレック  
クリムト

### 透視図法の変容



橋の構図  
枝垂れ越し  
木の間越し  
近景の人物拡大  
窓越しの風景  
断切りの構図

○透視図法について



西欧美術は、ルネッサンス以来ずっと透視図法、つまり一極集中的なパースペクティブによって画面が構成されてきました。その最も有名なのがダビンチの「最後の晩餐」ですが、この視点はいわば一神教的な、唯一神のまなざしであったわけです。今、お見せしたように、日本絵画は遠と近をそれぞれ別の視点から配合して描いています。ゴッホやゴッガンをはじめ印象派の画家達が魅了されたのは、葛飾北斎や安藤広重らに代表される日本の浮世絵の大胆な構図や抽象化表現にもまして、このような複合的な視点だったわけです。これはその後ピカソらのキュビズムに受け継がれていきますが、ジャポニスムこそ西洋美術のカタストロフィックな変容の特異点を与えたといえるでしょう。そして、今、段階を追って説明してきた日本絵画の技法のステップこそ、見立ての技法の段階にほかならないのです。西欧文化の脱中心化はすでにこの時始まったといえるでしょう。

最後に、なぜ私が、芸術文化のカタストロフィックな特異点にこだわるかを話して終わりたいと思います。それは、歴史的にみても、また私が身をもって味わった経験からも、芸術文化さらには芸能は、政治や経済の変化よりもはるかに先駆けて、時代を切り開いているからです。

最初に述べたように、私たちは今まさに未曾有の局面に立たされていますが、それを克服するためには、一見迂遠のように思われるかもしれませんが、芸術文化の視点からこの未曾有の事態を見つめてみる必要があるのではないかと思うのです。

